

特集 観光 地域の光をうみ出す	Special Features Tourism Creating Attractive Feature of the Region	観光の現場から… News from A Tourist Area
<h2>町並み保存と観光</h2>		
<h3>観光vs保存、保存vs生活という対立を超えよう</h3>		
福川裕一	FUKUKAWA Yuichi	千葉大学 / 工学部 / 教授



1—はじめに

町並み保存と観光の関係は、まことにアムビヴァレンツである。そこには次のようなジレンマがあるからである。(ここでは、かつて商業の中心であった歴史的町並みを想定して話を進めていく)：

- ・歴史的な町並みを活性化するためには商業活動がうまくいかなければならない
- ・安易な観光化は、歴史的な町並みの価値を損ねてしまう可能性がある。

前半には、1) 歴史的町並みが文字通り生き生きとした形で保全されるためには、建物がその本来の用途で使われることが望ましい、2) 店主である所有者が建物それ自体を維持していくためには、そこでの商業活動から必要な収益がある必要がある、のふたつの意味が含まれている。

観光客がたくさん訪れるようになって、地元には十分な経済効果を生むとは限らない。とくに温泉でのどんちゃん騒ぎを主目的に、バスを連ねてくる観光客がもっとも始末に負えない。短い自由散策時間しか与えられず、さっと見てさっと通り過ぎる。こんな観光はもう時代遅れと思うのだが、まだまだ根強い。このような客におもねるとそれこそ安易な観光化に陥りかねない。

さらに、その町並みで商業活動を営まない者にとっては、多くの場合観光化は迷惑そのものとなる。観光客が勝手に戸口を開けてのぞき込む(今まで鍵をかけたことがなかったのに、鍵をかけるようになった)、観光客が勝手に敷地内に入り込む、観光客の服装などが風紀を乱す……。

観光客の中にも、次のような言い分を持ちだすひとが出てくる：「せっかく静かな歴史的な町並みの風情を楽しむにきたのに、すっかり観光化されている。がっかり

だ」。その反対の人もある。安岡章太郎は紀行文『街道の温もり』で、木曾の妻籠を次のように評した：「ここには学者が調べた史実はあっても、歴史がないのではないか。家や道路は、普通に復元されていても、そこに住んでいる人達の生活がないし、昔の人の感情がない」。安岡の眼には、専門家から見るとオーセンティックとは言えない、そして観光化があからさまに繰り返されている馬籠や、住民の希望に比較的寛大な修理・修復をおこなってきた奈良井の方が好ましくうつっている。安易な観光化を避けようと「三業禁止」(ひとつの店が、食堂・土産物店・民宿の3つをいっぺんにやらない)や「コーヒーを出さない」といった原則をたて、幕末に照準を合わせて建物の修景を行ってきた妻籠の人々の努力を無視するような感想に、妻籠応援団は愕然とする。

観光の問題は一筋縄ではいかない。すべての人を満足させるのはあきらめた方が良さそうだが、基本的な課題ははっきりしている。冒頭にあげたジレンマを、ジレンマとせずに関立させ、相乗的な効果を生み出していくこと。歴史的な町並みを最大限に生かす商業活動に取り組むことである。しかし、保存vs観光、保存vs生活に問題を先鋭化する考え方にも問題がありそうだ。実際、考えてみれば、町並み保存にはほかにも目標がありそれらの達成のためにはさまざまなジレンマが伴う。そこにどのような道筋を見いだしていくかが町並み保存計画にはほかならない。川越・一番街のケースについて検討してみよう。

2—川越

川越では、一番街商店街協同組合の会員が「川越一番街・町づくり規範に関する協定書」を結び、「町づくり規範」を決め、毎月一回「町並み委員会」を開催して、町づくり全般について意見交換をするとともに、建物の新

築・増築・改築をチェックしている。上記の問題に対して川越・一番街が十数年前に出した解答は、この協定書の第1条「はじめに」にある：

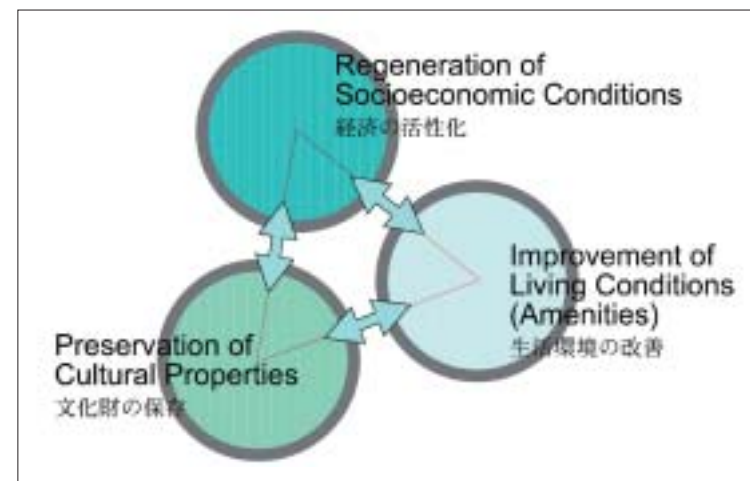
川越一番街は、埼玉県西部の一大中心地として栄えてきた。その繁栄を背景としてつくられた蔵づくりと町家、そして近代洋風建築が織りなす町並みは、江戸時代から現代に至るわが国都市建築の変遷を示す本邦意随一のものといえよう。

しかし多くの建物が老朽化し、建て替えの時期を迎えて町並みにはさまざまな変化が起ころうとしている。一方商業活動もかつての勢いを維持しているとはいいがたい。町並みの変化と商業活動の活性化、そして居住環境の充実・改善が必ずしも歩調を合わせていないのが現状である。

私たちは、この傾向に歯止めをかけるべくさまざまな努力を重ねてきた。今のところ、これら努力は個人のレベルにとどまっている。しかし、町並みは、自由な個人の努力が交響し、単独では得られない一段と高い価値を実現するとき、限りない魅力を発揮しうるのだといえよう。川越一番街商業協同組合は自律的な個人の努力が一番街再生へ向けて結集されるよう、組合員の総意に基づき、本協定書を定める。

本論との関係において、ポイントは「町並みの変化と商業活動の活性化、そして居住環境の充実・改善が必ずしも歩調を合わせていない」という部分である。これを受けて、第3条で三つの基本目標を掲げる：

1. 商業活動の活性化による経済基盤の確立
2. 現代にふさわしい居住環境の形成と豊かな生活文化の創造
3. 地域固有でしかも人類共有の財産としての価値を持つ歴史的町並みの保存と継承



■図1—町並み保存の3つの目標

ここで、町並み保存とともに、商業活動の活性化、良好な居住環境の確保・維持を掲げ、これら3項目の鼎立を当地区の町づくりの基本目標とするのである。

もちろん、3項目を同時に満たすことは冒頭のジレンマのように容易ではない。これら3項目は、何も工夫をしないと対立しあう関係にある。商業を活性化することと住宅としての居住環境を維持・保全することはしばしば対立する(1と2)。住宅としての居住環境を維持・保全すること、つまり近代的な快適な生活をおくることと町並みを保存することとは一般には矛盾することと捉えられている(2と3)。そして町並みの保存と商業活動の活性化は一般には相容れない(3と2)。しかし、この三すくみ状態を超え、いずれも満たされるようにすること、そのための道を見いだすことこそ町並み保存の目標であり、町並み保存・町づくり計画の基本課題であるとするのである。道が見つければ、観光か保存か、保存か生活かという対立を止揚できる。

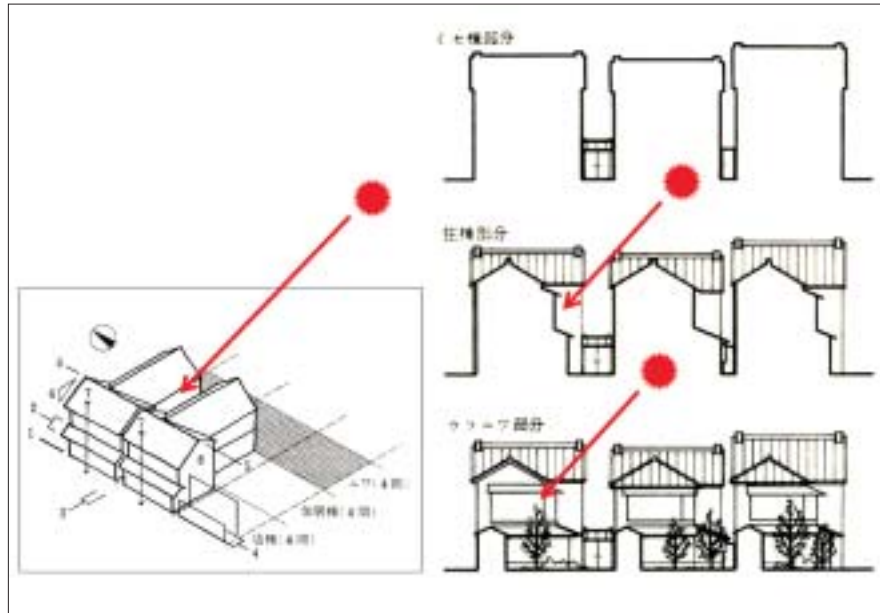
そんなことは可能なのか。いや、可能にしなければ、生けるコミュニティとしての歴史的な町並みを保存することはできないであろう。

可能であるためには、1) 商業活動が生活空間としての町並みと両立し、2) 歴史的町並みが現代の居住空間としても優れていることを立証し、3) 町並みをいかした商業が成立可能であることを住民が確信しなければならない。このうち、1)は現役の商店街である一番街ではあまり大きな問題ではない。課題は、2)と3)である。

3—歴史的町並みが現代の居住空間としても優れていること

まず「歴史的町並みが現代の居住空間としても優れていること」は、一番街の南に接する仲町のマンション建設計画をきっかけに行われた「デザインコード調査」(1982)であきらかにされた。

明らかになったのは、伝統的な町家の形式が、密集市街地の中で、あるいは店舗併用住宅として、豊かな生活空間を作り出しているという事実である。知られるように、川越の町家は、全体を土で塗り固めた「蔵造り」が特徴である。鬼瓦の後ろに盛り上げられた影盛や箱棟が、ことさらに屋根を立派に見せる。また2階の金庫の扉のような両開き戸、火災時に戸のすき間を目塗りするため庇の上に置かれた台など、大げさに様式化された意匠が印象に残る。しかし、全体的には、このような蔵づくりは数の上では少数



■図2—川越町家のシステム

こうして伝統町家は、一定の形式を踏むことによってお互いに、密集した市街地で最大限の環境条件を保障しあい、景観上、住環境上、商業空間上、安定した環境を保ってきた。賑わいのある街路＝商業空間と、静かで一定の環境が保障された住宅とを両立させた。そこには、住みにくいと信じられている伝統的住宅とは裏腹の、きわめて合理的な姿がある。むしろ秩序を失った今日の都市こそが見習うべきものである。この原則は、町づくり規範の中では「4間・4間・4間のルール」となった。

このほか、コミュニティとプライバシーの適切なバランスを作り出していること、その中で庇・軒・格子などファサードが中間領域を形づくり重要な役割をはたしていることなど、町家の空間構成には多くの優れた点を見いだすことができる。

川越では、文化財としての町並みの調査は1976年に行われた。「デザインコード調査」は、その歴史的な価値をもつ町並みや町家に現代的な意味を与えた。この新しい解釈を通して、住民にとってはいわば極楽であった町家に、現代の文脈の中で改めて意味が与えられ、そこにコミュニティの価値が見いだされたといえよう。もちろん、それらが知識にとどまっているだけでは、永続的な町づくりにはつながらない。このようなコミュニティの価値を再認識し、実践していくため、協定を結び「町づくり規範」を決めるのである。

4—町並みをいかした商業が成立可能であること

もうひとつのポイント「町並みをいかした商業が成立可能であること」は、1988年度に商店街が取り組んだコミュニティマート構想事業の中で、人々の確信となった。この作業の中でこのポイントをもっとよく捉えたのは、同時に制作した「商いの町」というドキュメンタリー映画であった。

映画では、蔵づくりの老舗・町勘金物店がフィーチャーされる。映画では、お客さんとの見事な対話で、包丁をはじめ刃物を商うご主人の様子が捉えられるが、ストーリーはそこにとどまらない。まず、鎌の産地である信州古間の問屋を訪ね、町勘からの古い注文書を映し出しながら、職人〇〇産地の問屋〇〇町勘金物店〇〇消費者の

派であって、多くは木部を露わにした町家である。建物の間取りや構造は、蔵造りもそうでない建物も基本的には変わらない。その基本的な特徴は以下の五点に要約される：

- 1) 敷地は間口が狭く、奥行の深い鰻の寝床型である。
- 2) 建物はこの細長い敷地に、表から、店棟、住居棟、後ろ庭、そして離れ・蔵などの付属屋の順にならぶ。
- 3) 店棟は、約1間の庇を出して、道路に接して建てる。ほとんどが2階建ての平入切妻形式である。道路に接して建てられ、隣とほとんど間隔をあげない。
- 4) 正面には深い庇がある。庇下は、昼間は格子をはずして開け放たれる。
- 5) 住居棟は、「オク」と呼ばれる1-2室の部屋をもつ1-2階建ての建物で、多くは棟を道路と垂直（つまり店棟と垂直）の方向へ向ける。住居棟は敷地の北側に寄せて建て、南側に空地を残す。この空地は関西の町家という通り庭に相当し、1階は下屋を出して台所とすることが多いが、2階はこの空間を介して南側からの日光を部屋へと入れる。

川越の町家では、これら店棟、住宅棟、庭がそれぞれ道からはほぼ4間ずつの奥行をもって並ぶ。この結果、店棟は街路沿いに並び、囲まれた賑わいのある街路空間を生み出すと同時に、背後の静かな住居空間を隔てる壁となる。住居棟は、ちょうど団地の南面平行配置と同じ原理で並び、お互いに南からの採光を可能とする。庭も敷地をこえて連続し、いわばグリーンベルトを形成する。住居棟は、このグリーンベルトを介して、隣の敷地ごしの日光を安定的に受けることができる。



■写真1—町勘金物店の正面(映画「商いの町」より)



■写真2—包丁をとくご主人



■写真3—鉛筆の削り方を教えるご主人



■写真4—新しい職人の誕生

つながりが明らかにされる。町勘は問屋を通して「〇〇何丁、△△何丁、・・・」という注文を出している。〇〇や△△は鎌に刻まれた職人の刻印である。職人は一生を通じて町勘へ鎌を供給し続ける。そして町勘は、その鎌を使った人の意見を「今年の鎌は甘いぞ」といった調子で届けるのだという。職人と町勘の間には直接の面識はない。職人と消費者ももちろん直接の知り合いではない。にもかかわらず、職人と消費者の間はきちんとつながっているのである。小売業の意味やあり方を再認識することになるが、映画はまだ終わらない。

最後に登場するのは、趣味が高じてサラリーマンをやめてサバイバルナイフを作り始めた人である。はじめは客として町勘に来たこの人が、職人としてはじめての注文を町勘から受け、丹念に製作したナイフを納品する。町勘は、毛筆のネームプレートをそえて、そのナイフをショーウィンドウに飾る。「この町の歴史と商いの匠が、新しい職人を生み出しました」とナレーションがたたみかける。

限られた撮影期間にこのような商人の姿を捉えた制作者たちの力量も大きいですが、偶然に切り取られた期間にこのようなドラマを提供した町の実力にも脱帽せざるを得ない。大資本による流通とは異なる商業の可能性を確信させるに十分である。

5—基本は「住みたい町」

論点を、観光か生活かといった二項対立に持ち込むと本当にジレンマに陥ってしまう。川越のケースで紹介したように、生活・保存・経済と目標を3つに大きくくりしてみると問題の構造がより明確になり、解決の道筋も見つけやすくなる。

川越ですべてがうまくいっているわけではない。しかし、町並み委員会という住民による自律的町並み保存がはじまり、間もなく20年を迎えようとしている背景には、このような点に、住民の大方の理解があったことは間違いない。

観光立国が政策課題として浮上している。海外から毎年日本を訪れる観光客はおよそ500万人。これは世界で35位、フランスの15分の1にすぎない。一方、日本人の海外旅行者は来訪者の4倍である。日本の都市の惨状を思うと、日本人は、日本の醜い都市でせつせと稼ぎ(あるいは稼ぐために醜い都市を再生産し)、海外で美しい都市を消費しているのでは、と思いたくなる。「住みたい国が人を呼ぶ」という基本に立ち戻って町並みと観光の問題を捉え直そう。自分の町を住みよくしようとする人が増えれば、安直な観光も減るに違いない。